

“ばらと涙”の詩人ヤロスラフ・ サイフェルト

飯 島 周

SUMMARY

Jaroslav Seifert (1901-), the Nobel Prize winner for 1984 is one of the greatest poets that Czechoslovakia has ever produced. His poetry has passed through many phases, including 'proletarian poetry,' 'poetism,' 'ballad,' and 'meditation.' He has evolved his own poetic style, which seems at a glance very simple, but so elaborate that we cannot judge which is the best of his poems. Besides his numerous poems he published a book of memoirs of his long life, entitled "All the Beauties of the World," which he has pursued all his life. He has sometimes been evaluated only by his attitudes toward the communist government, but this perhaps is not fair. He is a born lyric poet and could be symbolized by 'Roses and Tears.'

本年度ノーベル文学賞を受けたチェコの詩人ヤロスラフ・サイフェルト (Jaroslav Seifert 1901—) は、本国では以前から高名であり、国民芸術家の称号を持ち、多くの作品が愛唱されている。また、国外でも標準的な文学事典や百科事典には、必らずと言ってよい位名前があげられ、いわゆる世界文学に関心のある読者なら、どこかで目にしているはずである。ただ、チェコスロヴァキアという国自体が弱小国とされ、さらに、政治的には社会主義体制を取っているのに、言語的には国際的普及度が小さく、従ってその文学も、国際的に正当な評価を受ける機会に乏しい。特に我が国には、文化的大国主義とでも言うべき現象があり、チェコに限らず、小国と判断される国の言語や文学に対して同情的ではない。たとえば、この詩人についても、我が国ではほとんど知られていなかった。本来、作家はその作品によって判断されるべきであろうに、この詩人の作品の翻訳が無に等しい⁽¹⁾のは残念である。そこで、筆者自身もいわば素朴な読者に過ぎず、また、ほんの一部に過ぎないが、サイフェルトの作品の紹介とその横顔の素描を試みたい。

まずその略歴を記しておく。⁽²⁾ サイフェルトは、1901年9月23日、プラハのジシュコフ (Žižkov) 地区の労働者の家庭に生れ、ジシュコフのギムナジウムで5年まで、さらにヴィノフラディ (Vinohrady) のギムナジウムで第6年を終えた。この頃から既にジャーナリズムと文学に関係していたが、正式に職に就いたのは共産党機関紙『ルデー・プラヴォ』 (*Rudé právo*) が最初である。この時から共産党との関係が始まり、1922年にはブルノの共産党日刊紙『ロヴノスト』 (*Rovnost*) で働らき、詩人ハラス (F. Halas 1901—49) と親交を結んだ。その後諷刺週刊『スルシャテツ』 (*Sršatec*) の編集やプラハの共産党出版局員などを歴任した。29年には有名な7人の共産党作家の共同宣言に署名したが、これは当時の共産党指導部の方針に反対したものである。結果的には離党し、以後、演劇評論誌『ノヴァー・スツェーナ』 (*Nová scéna*)、週刊『ペストレー・クヴィエティ』 (*Pestré Květy*)、日刊『ラニー・ノヴィニ』 (*Ranní noviny*) の編集をし、第2次大戦中は日刊紙『ナーロドニー・プラーツェ』 (*Národní práce*) に関係、45年の5月から49年まで『プラーツェ』 (*Práce*) 紙、同時に45年から48年までは文芸月刊誌『キティツェ』 (*Kytice*) の編集をした。49年からは作家活動に専念。68年には作家同盟議長に選ばれ、69年から70年まで実際にその地位にあったが、いわゆる正常化による作家同盟の解散、再編成のため引退した。作家としての活動中、56年の第2回作家同盟大会では、創作活動の自由を求める発言をし、68年には「二千語宣言」、77年には人権についての「憲章」に署名し、その意思を明らかにした。その結果、国内での新作の発表を制限されることになった。(このような点で、サイフェルトを反体制の作家と呼び、政治的イデオロギーの面でのみ評価しようとする傾向が一部に見られるが、これは正当なこととは思えない。⁽³⁾) 外国旅行の経験も、もちろんある。24年には、親友だったアヴァンギャルドの理論家カレル・タイゲ (K. Teige 1900—51) と共に、ウィーンおよびイタリア各地を経て、マルセーユとパリに旅行した。パリにはその後2回行っている。24年にはさらにジュネーヴ、25年と28年にはソ連、29年には再度イタリアを訪問した。これらの旅行は、作品の題材や新しい手法の参考にもなったことであろう。

創作活動の範囲は、主として詩、特に叙情詩であるが、散文の小品も書き、翻訳も行なっている。たとえば、アポリネール (G. Apollinaire 1880—1918) のコント集『虐殺された詩人』 (*Le Poète Assassiné*) を共訳し、ヴェルレーヌ (P. Verlaine 1844—96) の作品も幾つか訳している。これは、20年代の有名なアヴァンギャルド芸術家集団「デヴィエトシル」 (*Devětsil*) に属していたことに関連して、サイフェルトの一面を説明する。(デヴィエトシルとは、植物の“ふき”の仲間であるが、“九つの力”を意味し、このグループの構成者の数からこの名がきまったと言われる。) 最初の詩は20年に『プラヴォ・リドゥ』 (*Právo lidu*) 紙に発表され、以後多種多様な新聞雑誌類に作品を寄せた。たとえば『ルデー・プラヴォ』、『ムラディー・ソツィアリスタ』

(*Mladý socialista*), 『プロレトクラト』 (*Proletkult*), 『アヴァントガルダ』 (*Avantgarda*), 『リドヴェー・ノヴィニ』 (*Lidové noviny*), 『リテラールニー・リスティ』 (*Literární listy*) など、政治・文芸関係の硬派のものが多く、『エロティツカー・レヴェー』 (*Erotická revue*) という名も寄稿誌の中に見られる。36年、55年および68年には国家賞、66年にはチェコ作家同盟出版賞を受け、67年には国民芸術家の称号を得て、名実ともにチェコ最高の詩人として認められた。

具体的な作品を拾って、年代順に記すと、次のようになる。特に断りのないものは、すべて詩集である。

- 『涙の中の町』 (*Město v slzách*) 1921
『愛そのもの』 (*Samá láska*) 1923
『無線通信の電波に乗って』 (*Na vlnách TSF*) 1925
『歌の下手なナイチンゲール』 (*Slavík zpívá špatně*) 1926
『伝書鳩』 (*Poštovní holub*) 1929
『ライスカー・ザフラダの上の星』 (*Hvězdy nad Rajskou zahradou*) 1929 散文集
『ひざのりんご』 (*Jablko z klína*) 1933
『ヴィーナスの腕』 (*Ruce Venušiny*) 1936
『春よ、さらば』 (*Jaro, sbohem*) 1937
『八日間』 (*Osm dní*) 1937
『チェコの秋』 (*Podzim v Čechách*) 1937
『あかりを消せ』 (*Zhasněte světla*) 1938
『ボジェナ・ニェムツォヴァーの扇』 (*Vějíř Boženy Němcové*) 1940
『光をまとって』 (*Světlem oděná*) 1940
『手と炎』 (*Ruka a plamen*) 1943
『石の橋』 (*Kamenný most*) 1944
『土のかぶと』 (*Přilba hlíny*) 1945
『ヴィクトルカの歌』 (*Píseň o Viktorce*) 1950
『プラハのモーツァルト』 (*Mozart v Praze*) 1951
『ヴルタヴァ川』 (*Vltava*) 1951
『かあさん』 (*Maminka*) 1955 童謡集
『少年と星』 (*Chlapec a hvězdy*) 1956
『プラハ』 (*Praha*) 1958
『島でのコンサート』 (*Koncert na ostrově*) 1965
『ハレー彗星』 (*Halleyová kometa*) 1967
『ペスト記念柱』 (*Morový sloup*) 1971
『ピカデリーの雨傘』 (*Deštník z Piccadilly*) 1978
『この世の美しきものすべて』 (*Všecky krásy světa*) 1981 回想記
『ヴィーナスの腕』 (*Ruce Venušiny*) 1984

上記の表は完全なものではなく、他にも多くの作品集、選集がある。また、再録によって内容が重複している場合も多い。特に、最後のものは、36年のものと同じ題名であるが、ほとんど再録で、原稿から直接採ったものは数篇しかない。しかし、この詩人のアンソロジーとして、現在入手できる最も便利な編集で、巻末にはすぐれた解説⁽⁴⁾があり、参考になる。

サイフェルトが初めて詩作を試みたのは、その作品「詩人であること」(Být básníkem 1983)によれば“ヴルフリツキーが死んだ年”すなわち1912年である。ヴルフリツキー (J. Vrchlický 1853—1912) は有名なチェコの詩人で、多くの人に影響を与えているが、11才のサイフェルトにも強い印象を与えたのであろう。そして、もしこの年を出発点として考えるなら、この詩人は、83才の今日まで、実に70年以上も詩を作り続けて来たことになる。この一事をもってしても、まさに異例であると言えよう。このような長期間では、もちろん作風に変化が見られる。初期の素朴なプロレタリア詩から、技巧に富んだポエティスムの時代、親しみやすい歌謡(バラッド)の時期、そして最後の瞑想詩の段階と、多くの種類において考察できる。ただ、最初から、ある一定の気分が漂い、それが全部の時代に通じているとの指摘がなされている。⁽⁵⁾ これは、何かへの郷愁とでも呼べるもので、ひとつの重要な特徴であろう。サイフェルトは、自分自身の文体を確立したが、その独自の文体とこの気分との融合が、大きな魅力となっている。たとえば、カレル大学のブリアーネク教授 (F. Buriánek 1917—) は、この気分に関連して、次のような意味のことを述べている。⁽⁶⁾ すなわち、サイフェルトのプロレタリア詩は、政治的なテーゼや煽動的意図によるものではなく、プロレタリアの貧困と、その楽しい人生へのあこがれについての、具体的な情緒的な想いから出ている。また、プラハとその住民をこよなく愛するという点でも、文学的系譜としては、チェコの国民文学の父と呼ばれるネルダ (J. Neruda 1834—91)⁽⁷⁾ の継承者とも言えるであろう。つまり、生身の人間一庶民一としての喜びや悲しみ、美しいものや楽しいものへの夢、自由を求める気持などを、終始歌い続けて来たと言える。以下、若干の作品を実例として、その創作の跡をたどることとする。

初期の例として、たとえば「乙女らの歌」(Píseň o dívkách 1923) があげられる。参考のため、以下引用の作品には、あえて拙訳を添える。

Uprostřed města dlouhá řeka teče,
sedm mostů ji spíná,
po nábřeží chodí tisíc krásných dívek
a každá je jiná.

Od srdce k srdci jdeš zahřát si ruce
v paprscích lásky veliké a hřejné,
po nábřeží chodí tisíc krásných dívek
a všechny jsou stejné.

町のまん中を　ながながと　川が流れて行く、
七つの橋が　それを結んで、
岸辺を　千人もの　美しい乙女らが歩む
ひとりひとりが　ちがう様子で。

心から心へと　手をあたために　きみは行く、
大きく熱い　愛の光のさすところに、
岸辺を　千人もの　美しい乙女らが歩む
みんながみんな　おなじ様子に。

4行ずつの2連から成るこの詩の構成は、一見して理解できるであろう。韻律は多少不規則であるが⁽⁸⁾、各連とも2行目と4行目が脚韻を踏み (-iná と -jiná, -ejné と -ejné)、第1連と2連

との間では、それぞれ1行目と3行目の脚韻が対応している（-če /tʃe/ と -ce /tse/, -ívek と -ívek）。第1連の1行目、3行目、4行目は、第2連の1行目、3行目、4行目と音節数が同じである（11, 12, 6）が、2行目だけが不一致である。（第1連では7, 第2連では11）しかし、意味を考えると、これはかえって著しい効果を示している。すなわち、第1連の“七つの橋が結ぶ”緊密感と、第2連の“大きく熱い愛の光”が放射するそのひろがりとは、鮮やかな対照として言語化されていると言えないだろうか。そして、“ながながと川の流れる”プラハの町で、若き日のサイフェルトが歌ったこの光景——ひとりひとりがちがいがいながら、みんながみんなおなじである美しい娘たちが歩むその光景は、まことに印象的である。さらにつけ加れば、この詩の用語は全く日常的なものであり、特殊で難解な言葉はひとつもない。この一見素朴な詩には、後に多くの人から“古典的完成に達した”との評⁽⁹⁾を得たサイフェルトの詩風の素地が示されている。

これに続くポエティスムの時代は、さまざまな実験詩が作られた。ポエティスムとは、たとえばヴァーツラヴェク（B. Václavěk 1897—1943）の解説⁽¹⁰⁾によると、プロレタリア詩に対する反動として生じたもので、詩から社会的内容をすべて取り去って、純粋な叙情詩とすることを目的とした。これは、チェコの叙情詩の歴史における最後の大きな発展とされ、この時期、才能のある詩人たちが輩出した。文学史的には、ダダイスムとフランスのシュルレアリスム相互の影響を受け、陽気さと悲しみの交錯する主題と、潜在意識への訴えが特徴的である。この派の芸術家の代表的グループが、前述の「デヴィエトシル」で、その中心が理論家のタイゲであった。この運動がフランスの動きと密接な関係があったことは、女流芸術家トワイアン（Toyen 1902—80 本名 Marie Čermínová）が象徴する。チェコのポエティスムは、やがて有名な言語学者ヤコブソン（Roman Jakobson 1896—1982）や美学者ムカジョフスキー（J. Mukařovský 1891—1975）とも接触し、ロシアのフォルマリスムやプラハ学派の構造主義的分析をも理論的背景に持つようになった。

この時期のサイフェルトの作品は、花々しく数も多いが⁽¹¹⁾、紙数の関係もあり、「そろばん」（Počítadlo 1925）、「パンとばら」（Chléb a růže 1926）、「婚礼の歌」（Svatební píseň 1929）だけをあげておく。特徴らしきものが、部分的にせよ示されていると思われる。

Tvůj prs
je jako jablko z Austrálie.
Tvé prsy
jsou jako dvě jablka z Austrálie.

Jak mám rád toto počítadlo lásky!

きみの 片方の胸は
オーストラリアのりんご ひとつ。
きみの 両方の胸は
オーストラリアのりんご ふたつ。

なんて ぼくは この愛のそろばんが好きなんだろう！

× × × ×

Mezi dvěma póly napjatý svět
jako osličí kůže
Mezi dvěma věcmi život

chléb a růže

Svět zní Bubny znějí
Pro malé věci velká válka
Vítěz i poražený se domů navracejí
Jaká dálka jaká dálka
je domů

Dvě hrací kostky dvě kouzelná slova
v kornetu dějin chléb a růže
Na převráceném bubnu hrajte znova
Míchajíce prudce kornet v dlani

Na osličí kůže válečného bubnu
pro naši lásku hlad i umírání

二極間に 引き張られた世界
ろばの皮さながら
二物間に 人生
パンと ばら

世界は鳴り響く 太鼓は鳴り響く
小さな事ゆえに 大きな戦争も
勝者も敗者も 家へ帰って行く
いかに遠くとも 遠くとも
家へむかって

ふたつのサイコロ ふたつの呪文よ
歴史のコルネットの中の パンとばら
ゆがんだ太鼓を ふたたび叩けよ
激しく和する コルネットは手のひらに

戦いの太鼓の ろばの皮の上
飢えと死 われらが愛ゆえに

× × × ×

Kytice, závoj a slzy,
i štěstí rozplakává,
jak je to hezké,
když se někdo vdává.

Noc plná vášní
až do kuropění,
jak je to hezké,
když se někdo žení.

Kytice zvadla

a opadává,
jak je to smutné,
když se někdo vdává.

vějíř se zavřel,
hořkne políbení,
jak je to smutné,
když se někdo žení.

花たば ヴェイル おまけになみだ,
幸せすぎて 泣き出して,
なんて すてきな ことなんだ,
誰かがお嫁になるときは。

今夜は よっぴて 燃えるんだ,
にわとり ときを つくるまで,
なんて すてきな ことなんだ,
誰かが お嫁をとるときは,

花たばは しぼんだ,
はかなく 散って行く,
なんて 悲しいことなんだ,
誰かがお嫁になるときは。

扇は つぼんだ,
口づけは はろにがく,
なんて 悲しいことなんだ,
誰かがお嫁をとるときは。

「そろばん」と「パンとぼら」は、いずれも実験詩的な意味があると思われる。原詩では、“そろばん”の珠の所に単語がはめ込まれているが、これは、たとえば小学校の教室で計算法を教える時のような、大型のものだろう。この詩の中の“オーストラリアのりんご”は、異国情緒を漂わせながら何を象徴するのか、また“パンとぼら”とは何か、この謎は解きやすからぬ感がある。ただ、これらの詩には、明らかに当時のフランスの詩風の影響が見られる。特に「パンとぼら」は、アポリネールの詩集『アルコール』(*Alcools*)と同様、句読点を一切はぶき、内容的にも共通性がありそうである。また、“ろばの皮”は、サイフェルト自身が訳した『虐殺された詩人』(前述)中にある“ろば尽くし”の一節を思い出させる。このようなさまざまな試みの後、次第に落ち着いた詩格の整った作品が発表されるようになった。「婚礼の歌」はそのひとつで、軽快な民謡調の代表と言えるような内容を持っている。使われている言葉は日常的なものばかりだが、組合せが巧みで口調がよく、独創的な表現と陰喩に満ち、読者の心情に強く訴える。この点では、たとえば、36年の『ヴィーナスの腕』の標題と同名の作品の中にも、“ミロのヴィーナスに頭を抱えさせる”という意表に出る文句があり、その空想力の片鱗をうかがわせる。この作品などで、サイフェルトはチェコ詩壇での地位を不動のものにした。

やがて、ナチスドイツが次第に勢力を得て、混乱の時代がやって来た。その激動の前ぶれのよ

うに、1937年9月14日、チェコスロヴァキア共和国初代大統領の哲人政治家マサリク (T. G. Masaryk 1850—1937) が世を去った。『八日間』は、この日、すなわち9月14日から21日までに作られたエレジーをとまとめたものである。「その暗い朝」(To kalné ráno)「秋のレクイエム」(Podzimní rekvie), 「死との対話」(Rozhovor se smrtí) など、題だけ見ても悲しみと不安を暗示する。特に「その暗い朝」には、“その暗い朝を忘れるな、我が子よ”という繰返しがあり、マサリクに対する傾倒の深さを示している。さらに、屈辱のミュンヘン協定をチェコ政府が受諾した日付を題にした「1938年9月30日」(30. IX. 1938) という詩は、“みなもとよ、さらば”で始まる一種の別れの歌である。39年には遂にナチスが侵攻し、チェコスロヴァキア共和国は解体され、スロヴァキアは名目だけの独立を保ったが、ボヘミアとモラヴィア、つまりチェコはドイツの保護領にされた。しかし、ナチスの圧制の下にありながら、第2次大戦中も幾つかの詩集を公刊し、アレゴリカルな表現に頼らざるを得なかったが、ナチスと精神的に対抗し、チェコ語の純粋性を守り、真の意味での国民詩人になったと評価されている。

45年の解放直後の「プラハに」(Praze) や「花咲くマロニエのバリケード」(Barikáda z rozkvetlých kaštanů) は、いとしいプラハの町を再び自分たちの手に取り戻した感激と、そのために流された血をいとおしむ気持にあふれている。だが、次第に強められて来た社会主義リアリズムの傾向とは一致せず、『ヴィクトルカの歌』のようにすぐれた作品も、十分に評価されぬこともあった。それでも、“フルートの演奏ができたらなあ、韻を踏む詩をわたしが書けるように”で始まる「プラハのモーツァルト」は、すでに英独仏の各国語に翻訳され、国際的によく知られている。また、55年に発表された童謡集『かあさん』は、なつかしい母や家族の思い出を中心にした作品で、大きな人気を呼んだ。「窓辺で」(U okna) を一例としてあげる。子供向きであってもしっかりと軽く見るべきではない。この完成度の高さは、日本語への移植をまさに絶望的にさせる。

Když přišlo jaro, na pěšunku
rozkvetly stromy v jarním slunku.
Maminka, tichá jako pěna,
k oknu je v pláči odvrácena.
—Proč pláčeš, co máš za bolest,
řekni mi, čeho je ti líto?
—Však ti to povím, povím ti to,
až nebudou jednou stromy kvést.

Sníh padal hustě a co chvíli
vločky se na sklo přilepily.
U okna, byla málo světla,
maminka tiše něco pletla
a měla slzy na očích.
—Proč pláčeš, čeho je ti líto?
—Však ti to povím, povím ti to,
až nebude jednou padat sníh.

春が来て 路地のうえに
木の花が 春の日浴びて 咲き出した。
かあさん 静かな泡のように

窓辺に 顔むけ 泣いていた。
——なぜ泣くの、どこか痛いの、
話してよ、何で悲しいの？
——またいつか 話してあげる、話してあげるね、
もう木に花が咲かなくなったらね。

雪がこんこん 降って来て、
窓のガラスに ときどき 付いた。
かあさん 静かに 暗がり
窓辺で 何かを 編んでいた。
涙が光るよ、目の中の。
——なぜ泣くの、何で悲しいの？
——またいつか、話してあげる、話してあげるね、
もう雪が降って来なくなったらね。

56年の『少年と星』の後、病気などによる空白が続いたが、65年には『島でのコンサート』で復活し、再びその存在を明らかにした。これは、従来の整った詩とはちがひ、韻を踏まず、言葉も一層単純化し、日常身边を歌いながら、過去と未来、世界と宇宙を考える瞑想的傾向を示した。この傾向はずっと引き続いて、現在に及んでいる。67年には『ハレー彗星』を出したが、その後の新作は一旦国外で発表され、評判を得た後に国内で公刊が許される、という変則状態になった。その第1号とも言うべき詩集『ペスト記念柱』の題を持つ作品は“世界の四隅に、動員を解除された天軍の四公が面をむける……”で始まり、まさに中世の現出と黙示録の世界を思わせ、サイフェルトの精神に宗教が深く根を張っていることを感じさせる。同時に、サイフェルトの衰えぬ好奇心と探究心を示すものであろう。なお、この詩集には「マリファナの煙」(Kouř marihuany)という作品があり、詩をマリファナの煙にたとえる表現さえある。また、「ピカデリーの雨傘」という作品は、息子がロンドンみやげにピカデリーで買って来てくれた雨傘を手がかりにし、恋は思案の外であり、“イギリスの女王様を愛してしまうことさえある”という設定で、愛と生死のからみ合いを、宇宙に思いを馳せながら歌っている。その一節には、次のような文句がある。

Celý život hledal jsem ráj,
který tu kdysi býval,
a jeho stopy jsem našel
jen na ústech ženy
a na oblosti její pleti
vlahé láskou.

Celý život jsem toužil
po svobodě.
Konečně jsem objevil dvéře,
jimiž je možno k ní vejít.
Je to smrt!

一生の間 わたしは楽園を探した、
かつては この世にあったものだ、

そして その跡をわたしは 見つけた
もっぱら 女性の口もとに、
愛でぬくもった
そのやわ肌の丸みに。

一生の間 わたしは あこがれて
自由を求めた。
とうとう 戸口を わたしは見つけた、
そこを抜ければ 自由のもとへ行ける。
その戸口とは 死なのだ！

俗流に言えば、これは詩の根源であるエロスとタナトスを歌うものだが、この詩の発表時の詩人の年齢が、すでに80才に近いことを考えると、まさに壮絶な一生の感があり、批評の言葉もない位である。

以上で、全く不備ではあるが、サイフェルトの詩作の歴史をひと通りたどった。しかし、ここで、回想記『この世の美しきものすべて』に触れなければならない。これは、詩人の生涯にわたる思い出を、主としてプラハの町を舞台に描いたものである。4部101篇にわかれたこの長編の回想記は、散文詩とも言える美しい文体で、近來の名作と思われる。今世紀の前半、特に第1次大戦後に念願の独立を果した新生共和国の首都プラハは、文化的黄金時代と呼んでもよい位、知的エネルギーにあふれていた。この町で、“愛し、悩み、そして生きた”数多くの芸術家たちの姿が、控え目な筆致で浮びあがり、静かな年輪の積み重ねが感じられる。登場する人物の名は500を越え、チェコ人ばかりでなく、国外、特にフランスを中心とした作家や画家、音楽家の名も目につき、その多彩さを示している。この回想記の書き出しを要約すると、こんな内容である。

……静かに目を閉じると、多くの友人たちの美しい顔が浮かび、次々とより美しい思い出が去来し、まるでその人たちと昨日まで話していたかのようで、まだその手のぬくもりを感ずる……みんな死んでしまった。しかし、わたしは嘆かない。たとえ涙がわれわれの感性の最も美しい部分であろう⁽¹²⁾とも。ただ、わたしは細かな記録を書くのではなく、心に浮かんで来る思い出をそのまま記すばかりだ……。

そして展開される挿話は、時空を越えて、初恋の話から、若き日の体験や見聞、さまざまな交友の思い出となる。特に、タイゲ、ヴァンチュラ (V. Vančura 1891—1942)、ネズヴァル (V. Nezval 1900—58)、ノイマン (St. K. Neumann 1875—1947)、ホラ (J. Hora 1891—1945)、ハラスなど、同時代の作家たちとの関係は、当時のチェコ文学、とりわけ詩人の層の厚さを思わせる。フジタの絵の話、タイゲの死とそれにまつわるふたりの女性の悲話、2度目の妻に靴とズボン吊りと上衣を隠されたハシェク (J. Hašek 1883—1923) が、上衣なしでズボンを手で押え、スリッパのまま酒場へあらわれた話など、それぞれに興味をそそる。中でも、“白状しなければならないが、わたしにはちょっぴり享楽主義者のなところがある。食べることが好きで、何でもうまいと思って食べる。……がけっして食通ではない……”で始まるヤコブソンとの思い出は印象深く、この天才が3週間でチェコ語をものにしたことや、大変な酒豪だったことなどが語られている。サイフェルト自身も、たしかに飲み食いに関心が深かったらしく、この回想記にも食べ物や飲み物の話がふんだんに出て来る。これらの描写や作品の雰囲気から想像すると、陽気さや冗談を好み、偽善性を嫌う性格と思われる。少なくとも、政治性のみを前面に押し出すような人間ではないようだ。そして、この内容豊かな回想記の最後は、病院の場面である。患者として、

自分の名——サイフェルト——を呼ばれた後の看護婦とのやりとり……「あなた詩はお好きですか」「好きだよ……なぜそんなことを聞くの」「あなたもそんな（詩人と同じ）名前だから」……そして“もはやこれまで”という感じの“シュミテツ”（Šmytec）という一語で、この長い回想記は締めくくられている。

この小論も、そろそろ締めくくらなければならない。

サイフェルトの詩は“言葉のクリスタル”とさえ評されている。少しでもその結晶を構成する要素、つまり作品を組み立てる言葉を動かしたら、全体が崩れ落ちてしまうだろう。特に最終段階の詩は、散文詩の極致と形容できるかも知れない。そして、この長い長い詩人の生涯を象徴する言葉が、もしあるとしたら、それは“ばらと涙”⁽¹³⁾であろう。それは、人間らしい愛情、女性と楽しい人生へのあこがれ、郷愁、自己に対する誠実さなどの結合とでも表現できる状態である。“涙の中の町”から出発し、“ヴィーナスの腕”に夢を託し、“この世の美しきものすべて”を求めて魂の放浪を繰返して来た、この生れながらの叙情詩人は、体制とか反体制とかいう言葉に振り廻される、わずらわしい政治の世界を完全に超越しているように思える。この詩人が、例のオーウェル（G. Orwell 1903—50）が警告した、問題の“1984年”にノーベル文学賞を受けたのは、まさに象徴的と言えよう。

しかも、その態度は限りなく謙虚である。その謙虚な言葉のかずかずは、この小論の締めくくりにもふさわしいであろう。

たとえば「マリファナの煙」の一節：

Stačí jen jediná píseň,
aby lidem zatajil se dech
a aby dívky, až ji zaslechnou,
daly se do pláče.

Jak rád bych to uměl!

たったひとつの歌だけでよい、
みんなが はっとかたずを呑むようなら、
それを聞いたとき、乙女らが
涙に くれるようなら。

それが できたら どんなに嬉しいことだろう！

さらに、81年3月の日付と署名のある、84年刊のアンソロジーの扉の言葉：

Kdyby se mě někdo zeptal
co je báseň,
na pár vteřin byl bych v rozpacích.
A tak dobře to vím!

もしも 誰かが わたしに
詩とは何かと たずねたら
何秒か わたしは 途方に暮れるだろう。

そんなによく わたしは知っているのだ！

そして「かくてさらば」(A sbohem) 1971 の一節：

Poesie jde s námi od počátků :
Jako milování,
jako hlad, jako mor, jako válka.
Někdy byly mé verše pošetilé
až hanba.

Ale za to se neomlouvám.
Věřím, že hledat krásná slova
je lepší
než zabíjet a vraždit.

K miliónům veršů na světě
přidal jsem jen pár slok.
Nebyly o nic moudřejší než píseň cvrčků.
To vím. Odpust'te mi.
Už končím.

詩は この世の初めから わたしたちの道連れだ：
愛することのように、
飢えのように、疫病のように、戦争のように。
時には わたしの詩作は おろかしかった、
恥ずかしくなるくらい。

しかし それを 弁解はしない。
わたしは信ずるが 美しい言葉を求めるのは
ましな ことなのだ、
人の命をむやみに奪ったりすることよりも。

この世に何百万もある詩に
わたしが つけ加えたのは ほんの二、三節。
こおろぎの歌なみの分別しかないものだった。
それは知っている。許してほしい。
もうおしまいにする。

(注)

(1) 次のものが訳されている。

●「窓から見たジープ山」「オルシャニのある墓のところで」 栗栖継訳『世界名詩集大成』第15巻
平凡社 1960 (両篇とも『週刊朝日』1984年11月2日号に改訳、再録)

●「歌」(『伝書鳩』より) 千野栄一訳『言語』大修館 1984年7月号(詳しい作品解説がある) また『言語』1984年10月号には、サイフェルト作のレプス(陽気さが大きい人ほど幸福も大きい)が千野氏によって紹介されている。

(2) 以下 *Slovník českých spisovatelů* 『チェコ作家事典』トロント 1982 による所が多い。

- (3) たとえば1984年10月11日付『朝日新聞』朝刊には、サイフェルトのノーベル文学賞受賞決定の報に加えて、高名な世界文学評論家の談話がある。その趣旨は“サイフェルトのことはよく知らないが、チェコ文学ならクンデラ (M. Kundera)の方が上だから、この受賞はもっぱら政治的な理由によるものだろう”とのことである。クンデラについては、筆者も興味があり、初期のものから最新作までひと通り見ているつもりだが、まだサイフェルトより“上”とは思えないし、第一、そのような比較は意味がないと思う。なお、『読売新聞』10月12日付夕刊(栗栖継)、『毎日新聞』10月12日付夕刊(拙文)、『朝日新聞』10月13日付夕刊(千野栄一)、『東京新聞』10月18日付夕刊(関根日出男)にはそれぞれサイフェルトの紹介がある。
- (4) K. Chvatík : *Zázrak básnické přirozenosti aneb o poesii Jaroslava Seiferta na pustém ostrově* (詩の自然性の奇蹟または無人島でのヤロスラフ・サイフェルトの詩について) 1984。
- (5) たとえば A. Novák : *Czech Literature 1976*。これは *Přehledných dějin české literatury* (チェコ文学通史) 1946の補正版の英訳, W. Harkins の補遺がついている。
- (6) F. Buriánek : *Dějiny české literatury v první polovině 20. století II. Mezi dvěma světovými válkami* (20世紀前半のチェコ文学史II. 2大戦間の時期) 1974。
- (7) この作家も日本ではあまり知られていない。作品の訳としては「没落した物乞いの話」(*Přivedla žebračka na mizinu*)『世界短編名作選 東欧編』新日本出版社 1979(拙訳)がある。これは代表作『マラー・ストラナ物語集』(*Malostranské povídky*) 1875中の一編で、ノーベル賞を受けたチリの詩人ネルーダ (P. Neruda) はこの物語集を読んで感激し、その筆名を選んだと言う。
- (8) チェコ語の発音と綴りの関係はかなり規則的で、ほぼ綴り通りに読んでよい。母音の長短は区別され、á, í, ú(ù), é, ó は長母音。また ˇ は軟音(口蓋化音)を示す。単語の主強勢は原則的に第1音節にある。また、/r/ と /l/ は音節形成能力を持つ。たとえば sr-dce /sr̩tse/. なお, sedm は /sedum/ となる。したがって、この詩のリズムは、下の図で示されるであろう。この図は音節の強弱と長短を同時に示している。チェコ語の詩格の決定は強弱によるが、この詩は原則的に強弱格 (˘ ˘) で、時に強弱弱格 (˘ ˘ ˘) や弱弱格 (˘ ˘) などを含むと分析できる。

˘ ˘ ˘ ˘ ˘ ˘ ˘ ˘
 ˘ ˘ ˘ ˘ ˘ ˘ ˘ ˘
 ˘ ˘ ˘ ˘ ˘ ˘ ˘ ˘
 ˘ ˘ ˘ ˘ ˘ ˘ ˘ ˘

˘ ˘ ˘ ˘ ˘ ˘ ˘ ˘
 ˘ ˘ ˘ ˘ ˘ ˘ ˘ ˘
 ˘ ˘ ˘ ˘ ˘ ˘ ˘ ˘
 ˘ ˘ ˘ ˘ ˘ ˘ ˘ ˘

- (9) 訳されているものとしては、たとえばリーム (A. Liehm)『三つの世代』(*Rozhovory*) みず書房 1970(拙訳)中、ノヴォメスキー (L. Novomeský) の対話中での発言。また国外での評価として、その作品は“一見通俗的だが精緻”(apparemment populaire, mais élaborée) という *Dictionnaire des Littératures* パリ 1968が代表的である。
- (10) B. Václavěk : *Česká literatura XX. století* (20世紀チェコ文学) 初版1935 使用版は1974年刊。
- (11) 注(1)の「歌」もこの時期の代表作のひとつである。
- (12) サイフェルトはここで、*Lacrimae nostri pars optima sensus* をユヴェナリス (Juvenalis) の言として引用しているが、不正確かも知れない。なお、この *optima* は *nejkrásnější* と訳されている。そこで、*nejkrásnější* という語は、日本語では“最も美しい”ではなく“最も素晴らしい”と訳される可能性がある。
- (13) サイフェルトは実際に、ばらが大好きらしく、作品の随所で歌っている。特に「失われた楽園」(*Ztracený ráj* 1978)には、“ばらの花こそ、かつての地上の楽園がこの世に残してくれた、唯一のかたみだろう”という意味の言葉がある。涙については、例をあげるまでもない。しかし、冗談や陽気さを好み、人情家の面をはっきり示しながらも、精神的束縛は拒否するだけの気概が認められる。

〔1984年11月9日 受理〕